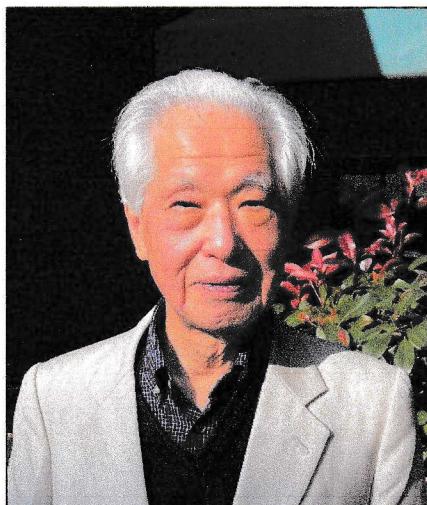


講師紹介

土谷精作（つちやせいさく）さん



講師近影

1935(昭和10)年生まれ。都立曰比谷高校、早稲田大学政治経済学部卒業後、NHK記者。

ポリオ大流行、吉展ちゃん事件、安保・大学紛争、水俣病裁判などを取材。その後、放送計画部長、放送文化研究所長を歴任。

専修大学、明星大学、大東文化大学で放送論、マスコミ論、情報文化論などを担当。

著書『放送 その過去・現在・未来』、『鎌倉の吉田松陰』、『生きていたサムライ精神—小泉八雲と七人の明治人』他多数。

日本記者クラブ会員、鎌倉ペンクラブ元副会長 現顧問。

本日の演題

1. 『小泉八雲・セツと鎌倉』

2. 『小泉八雲と早稲田大学』

演者紹介

坂 麗水（ばん れいすい）さん



演者近影

大阪生まれ、鎌倉在。 東洋英和、早稲田大学文学部仏文科卒。
現在、薩摩琵琶錦心流中谷派襄水会会員、日本琵琶楽協会会員、湘南日仏協
役員、鎌倉稻門会役員。

本日の演目

1. 『遠干潟（とうひがた）』

2. 『耳なし芳一』

【構成】

第1部 講演	土谷精作 「小泉八雲・セツと鎌倉」
薩摩琵琶	坂麗水 「遠干潟」
第2部 講演	土谷精作 「小泉八雲と早稲田大学」
薩摩琵琶	坂麗水 「耳なし芳一」

【講演の内容】

◇ 「小泉八雲・セツと鎌倉」

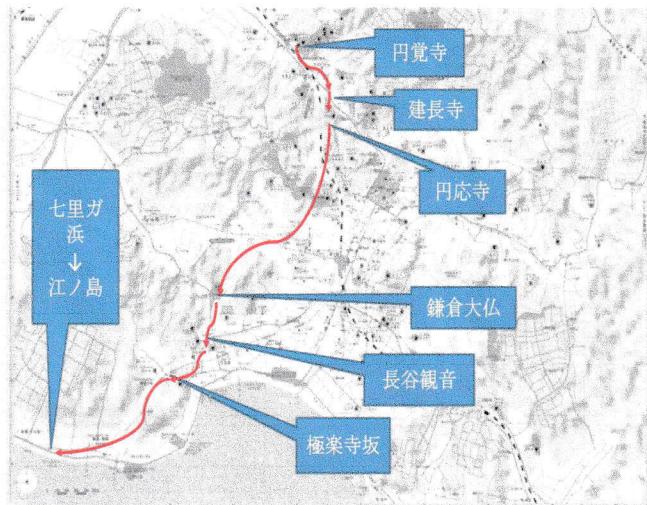
- ・小泉八雲・セツ夫妻と私
- ・来日直後に鎌倉・江の島を訪れたラフカディオ・ハーン
- ・洪鐘の音の描写、耳に敏感なハーン（円覚寺）
- ・慈愛に満ちた大仏の眼差し、日本の心を見たハーン（高徳院）
- ・緑濃い坂道、朽ち果てた石仏群に感傷の思い（極楽寺周辺）
- ・干潟を歩いて渡った片瀬海岸、「海は永遠の詩人」（江ノ島） →『遠干潟』

◇ 「小泉八雲・セツと早稲田大学」

- ・教師と作家の二足の草鞋
- ・東京帝国大学の小泉八雲と教え子たち
- ・早稲田大学からの招聘を喜んだ八雲
- ・八雲を慕った教え子たち
- ・小泉セツが語った『耳なし芳一』の裏話 →『耳なし芳一』

資料1 「鎌倉江ノ島詣で」の経路

- * 明治23年4月10日ころ
- * 通訳の学僧アキラの案内で
人力車に乗り、鎌倉江ノ島を
訪問
- * 鎌倉・江の島の紀行記は
明治中ごろの鎌倉を描写
- * 『日本の面影 I・II』
(池田雅之訳・角川ソフィア文庫)



資料2 洪鐘の音の描写（円覚寺）

先ほどの僧が、その釣鐘を突いてるように私に促す。私は手始めに、手で釣鐘の縁を触ってみた。音楽的な音が響いた。それから、私は力をこめて鐘に撞木を打ちつけてみた。すると、大きなパイプオルガンの低音部の豊かで深い雷鳴のような響きが一途方もなく大きく美しい響きが一あたりの山々にこだました。それから、小さな美しい反響音が、そのあとを追うようにして鳴り響いた。この素晴らしい釣鐘は、少なくとも十分間ほどもうなり続けたのである。

資料3 慈愛に満ちた大仏の眼差し（高徳院）

大仏様がたとえ生きた存在であっても、誰も恐がりはしないだろう。大仏様の柔軟で夢見るような無心の表情—容姿のすみずみまでに現れている無限の安らぎは、誰もが心惹かれる美しさに満ちている。しかも、予測に反して、この巨大な大仏様に近づけば近づくほど、その魅力はいよいよ増していくのである。

大仏様の気高く美しいお顔と半眼の眼差しを仰ぎみていると、青銅のまぶたは子どもの眼差しにも似て、じっとこちらを優しげに視つめておられるように思われる。そしてこの大仏様こそ、日本人の魂の中にある優しさと安らかさのすべてを象徴しているように感じられる。日本人の思惟が、こうした巨大な仏像を生み出すことができたのだと、私は考えている。

大仏様の美しさ、気高さ、この上ない安らかさは、それを生み出した日本人のより高い精神生活を反映している。

資料4 緑濃い坂道、朽ち果てた石仏群（極楽寺周辺）

私たちは、長谷観音をあとにする。あたりには人家は一軒もなく、道の左右に開けた緑濃い坂道は、だんだんと険しくなってゆく。頭上にそびえ立つ樹々の木蔭も、いよいよ深くなつてゆく。時々、苔むした寺の石段、彫刻の施された山門、高い神社の鳥居などの聖域を通過していくが、今はいちいち参拝している暇がない。この付近の荒廃した無数の神社仏閣を見るにつけて、死せる都、鎌倉の往時の榮華と広大さをひしひしと思い知らされる。…

すべてが古色蒼然としており、朽ち果てたままだ。長い歳月の間、風雪に痛めつけられたために、それと見分けのつかないものも、中にはあった。亡くなつた子どもたちの靈を守っている六地蔵の前で足を止め、私はしばらく感傷的なもの思いにふけってしまった。

資料5 干潟を歩いて渡った江ノ島（片瀬海岸）



往時の片瀬海岸と江ノ島

江ノ島の対岸にある片瀬という小さな村で、私たちは人力車を乗り捨て、歩いて江ノ島に向かうことにした。片瀬と江ノ島を結ぶ砂浜は、車が砂にめり込んでしまい、車夫が車を引くことが出来なくなるのである。私たちより先に来ていた参拝客を乗せた幾台かの人力車も、村の狭い往来で待機している。この日、江ノ島の弁天様のお宮に参詣した西洋人は、私一人だったそうである。

○海を「永遠の詩人」と讃えたハーン（江ノ島）

「神々の島」の素晴らしい一日。いまだ私たち西洋人が経験したことのない、より高貴なる真昼の世界。海と太陽の間の静寂に満ちた、緑したたる聖なる高みから見下す眺めの壮大さ。光明のごとく白く、神々しさをたたえた雲が浮かぶ天空。… この雲の形状は、青色の涅槃の世界に永遠に溶けていく菩薩の靈魂なのであろうか。（中略）

海こそは、古の時代からの最も卓越した「語り手」なのだ。海は、永遠の詩人、波の韻律でもって、世界を振り動かす神秘に満ちた参加の「歌い手」なのではなかろうか。

資料6 教師と作家の二足の草鞋を履いた小泉八雲

	来日後の略年譜	来日後の著作一覧
1890（40歳）	・来日、鎌倉江ノ島を巡回 松江中学赴任、西田と親交	
1891（41歳）	・小泉セツと夫婦 旧制熊本五高へ転任	
1894（44歳）	・神戸に転居	「知られぬ日本の面影」
1895（45歳）		「東の国から」
1896（46歳）	・帰化、小泉八雲と改名、 ・東京帝国大学講師に就任	「心」 「仮の畑の落穂」「異国風物と回想」
1902（52歳）	・英文学講師と作家活動継続	「靈の日本」「影」「日本雑録」 「骨董」
1903（53歳）	・文科大学の解雇通知 (学生の留任運動)	
1904（54歳）	・早稲田大学講師に就任 ・心臓発作で急逝	「怪談」「日本一つの解明」

資料7 東京帝国大学の小泉八雲

私が眞の詩といふ場合は、精神を深くゆさぶり、人の心を動かす類の詩の作品一言い換えれば、感情の詩——ということになる。これが、詩のもつ眞の文学的意義というものである。(中略)日本の詩人たちも、完璧な一篇の詩とは、その作品を読んだ後に、人の心に何かを一つまり、みなさんの身を打ち震わせるような何かを残すものでなければならない、と言明している。「赤裸の詩」と題された詩論の一節)

資料8 小泉八雲の教え子たち

【東京帝国大学時代の教え子】

- ・土井晩翠（詩人・天地有情、英文学者）
- ・上田敏（詩人、翻訳者・海潮音）
- ・小山内薰（近代演劇運動の牽引者）
- ・川田順（歌人、八雲退任で法科へ）
- ・厨川白村（英文学者、八雲の記録者）

【早稲田大学時代の教え子】

- ・小川未明（児童文学者、卒論は八雲）
- ・会津八一（歌人、書家、美術史家）
- ・秋田雨雀（劇作家、小説家）
- ・相馬御風（文学者、早稲田校歌）
- ・野尻抱影（天文民俗の隨筆家）